

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00458

研究課題名(和文)18世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷および内面描写の成立についての研究

研究課題名(英文)Eine Untersuchung ueber die Entwicklung des Fiktionsidees und die Entstehung der innerlichen Darstellung von der deutschen Romantheorie im 18. Jahrhundert

研究代表者

北原 寛子 (Kitahara, Hiroko)

北海学園大学・経済学部・教授

研究者番号：60382016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ドイツ語圏で1770年代以降急速に内面描写についての理論が発達したことに注目し、なぜ内面が言語的な表現の対象になったのかを各種文献の分析によって考察した。

内面描写をするためには、人間が社会階級や身分の類型としてではなく、個人という独立した存在であり、その内面は他人から察することができず説明を要するという前提がなければならない。ボードマーとフライティンガーの著作やクラデニウス『一般歴史学』(1752)、ヴィーラントの『ドン・シルヴィオ』などを通して、18世紀半ば頃からドイツで想像力がようやく明確に認識されるようになり、個人の内面が文学の描写の対象として理論化されたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際的にみて、18世紀ドイツにおける小説理論に関する先行研究のほとんどが、「近代小説は1770年代に詩人のおかれた社会環境と理想の軋轢から生まれた」とするディルタイの説をいまだに無批判に受け入れているのが実情である。

そうした状況において本研究は、内面描写という近代ドイツ小説理論を特徴づける要素が、1770年代に突発的に発展したのではなく、ドイツに小説Romanというジャンルがフランスから導入された17世紀後半よりさまざまな芸術論、学問論、詩論の議論を通して徐々に形成されたという具体的な過程を示したという点で学術的な意義を有している。

研究成果の概要(英文)：Das Projekt beschäftigte sich mit der Erläuterung, warum das Innere im 18. Jahrhundert im deutschsprachenden Raum als Objekt des dichterischen Ausdrucks entwickelt und thematisiert wurde.

Erst mit der Erkenntnis, dass der einzelne Mensch nicht als einen sozialen Typ sondern als Individuum zu betrachten ist, waere das Innere des einzelnen von aussen geheimnisvoll und damit erzählenswert. Zu diesem Thema wurden die verschiedenen Texten wie von den Schweizern, Wieland und dem Historiker Chladenius unter die Lupe genommen und interpretiert. Das Fazit lautet, dass die Fantasie und die Erfindung langsam in der Mitte des 18. Jahrhunderts aufmerksam angesehen und dadurch das Innere als wichtiges Element zum Gegenstand gerechnet wurde.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 18世紀 小説理論 想像力 虚構観 Bildungsroman

1. 研究開始当初の背景

(1) ドイツ文学研究においては、小説における内面描写は 1770 年代に社会の現実と自らの理想のはざままで苦悩する若い詩人の創造的なエネルギーによって突如として始まったものとするディルタイの定義が長らく普及している。ディルタイの定義の妥当性については、本研究代表者の別の研究で取り組んだ。その結論は、ヘーゲルの『美学』における小説に関する箇所をディルタイが理想化しつつも再話したものであり、18 世紀の状況を分析して導き出したものではないというものである。¹

(2) ディルタイの 18 世紀小説理論の説明が現実を反映していないとすれば、実際の状況はどうだったのかについて考察する必要がある。18 世紀小説理論については、これまでも様々な研究があり成果が認められていた。そのため近年はそれほど盛んに取り上げるテーマではなかった。しかし内面描写の成立や虚構観の変遷といった 18 世紀小説理論に特徴的な部分に特化した研究はほとんどなされてこなかった。そのためこの問題にあらためて取り組む必要があった。

2. 研究の目的

(1) 近代ドイツ文学の最大の特徴とされる内面描写がどのように 18 世紀を通して理論化されるにいたったのかを、著述者や発表された時代が異なる複数のテキストを比較して明らかにする。

(2) 内面描写が成立する背景には、内面が外界から独立して存在することが想定されなくてはならない。内面が独自に展開される場としての虚構観の発展を分析する。

3. 研究の方法

ドイツ小説理論の最大の特徴とされる内面描写の成立過程について、内面描写と虚構観をテーマとするヴィーラントの諸作品とスイス派（ボードマーとブライティンガー）らの記述を取り上げて、具体的に分析した。

4. 研究成果

デカルトが「われ思うゆえにわれあり」と記した方法序説を発表したのは 1637 年である。その後 18 世紀になって、文学においても人間が社会的な地位のステレオタイプとしてではなく、個人として独自に存在しようと受け止められるようになった状況が 18 世紀の複数のテキストを分析することで浮き彫りになった。

(1) 北原寛子：想像力の「発見」 —18 世紀小説理論からみたヴィーラント『ドン・シルヴィオ』における「想像力」についての一考察—、北海道大学独語独文学研究年報、第 44 号（2018）、72–88 頁。

<http://hdl.handle.net/2115/70505>

『ドン・シルヴィオ』はヴィーラントが 1764 年に発表した小説である。題名から推測で

きるように、『ドン・キホーテ』のパロディーである。妖精物語ばかり読んで育った青年ドン・シルヴィオが、それを架空の物語と受け止められるようになることで大団円を迎える。ドン・シルヴィオは自分が「想像」していたことを認識したのである。ここで想像力は、そのような精神的活動があることを確認する過程を必要とする新しいものとして作品のモチーフになっているのである。

(2) 北原寛子：J.J. ボードマーの詩学における「想像力」 —18世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷についての一考察—、北海学園大学学園論集、第178号（2019）、91–106頁。

<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/3750>

18世紀前半のスイスで活動したJ.J. ボードマーは、ミルトン『失樂園』をめぐるライプチヒで活動していたゴットシェートと論争を繰り広げた。彼らは天国や天使がどのように描かれるべきかという問題をめぐって議論しているが、そのテキストを読み解くと、人間は類として想像した世界を共有しているのか、個人がそれぞれ内面世界を有しているのかについて認識が発展していく過程が浮かび上がってくる。

(3) 北原寛子：世界は学び舎、人間は学徒：スイス派『想像力の影響と使用について』における「想像力」、北海学園大学学園論集第183号（2020）、83–96頁。

<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/4158>

ボードマーがブライティンガーとともに(2)で対象としたテキストよりもさかのぼる1727年に発表した『想像力の影響と使用について趣味の修正のためにあるいはあらゆる種類の描写の厳密な考察 当世有名詩人たちの読みどころを徹底的自由でもって判断』を分析した。想像力は考えることではなく「目の前にないものを見る」活動であると説明されている。一方でこの考え方で説明する限界のような歯切れの悪さもあり、その後の彼らの想像力観は、こうした前段階を経て発展し形成されたことが後付けられた。

(4) Hiroko Kitahara: Von der Veränderung des Menschenbildes und dessen Einfluss auf die Romantheorie im 18. Jahrhundert. In: Hrsg. von Yoshiyuki Muroi: Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Tokyo u. München; Indicium. 2020, S. 89-95.

<https://docplayer.org/151328336-Einheit-in-der-vielfalt.html>

18世紀の小説理論の発展は、人間像が個人的な違いの無い共通の存在ととらえられていた17世紀的な感覚から、個別の独自性を備えた存在へと変化したことが背景あることを、時代ごとの代表的なテキストにもとづいて論じている。

(5) 北原寛子：18世紀半ばドイツにおける歴史学と小説—クラデニウス『一般歴史学』を小説理論から読む—、北海学園大学学園論集第186号（2021）、21–36頁。

<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/4331>

18世紀の小説理論では、小説は歴史とどのような違いがあるのかについても盛んに論じられた。歴史学は18世紀半ばにようやく始まり、18世紀後半から19世紀にかけてようやく近代的な学問としての基礎を打ち立てる。歴史学の成立は、歴史記述と小説が分離する過

程としても考えられる。歴史が現実を引き受け、小説に想像が割り当てられたことを歴史学のテキストから分析した。

(6) 北原寛子：「すべての叙事文学の中間物」：18世紀小説理論の展開から読むヴィーラント『新アマデイス』、北海道大学独語独文学研究年報 47号（2022）、18－34頁。

https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/85704/1/47_02_kitahara.pdf

ヴィーラントが1771年に発表した韻文詩『新アマデイス』は、16世紀スペインで発表され長らくヨーロッパで愛された騎士小説『アマデイス・デ・ガウラ』の名を借り、ルネサンス期イタリアの英雄詩なども取り込みながら、奔放な想像力の世界を展開させる。散文小説を韻文詩で語ったり、過去の名作へのオマージュをちりばめることで、詩的世界における想像力の自由を高らかに歌い上げているのである。

<引用文献>

1 北原寛子：ディルタイのヘーゲル小説理論受容 —19世紀における *Bildungsroman* 概念展開についての一考察—、小樽商科大学人文研究、第130輯（2015）、139－158頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 北原寛子	4. 巻 186
2. 論文標題 18世紀半ばドイツにおける歴史学と小説 クラデニウス『一般歴史学』を小説理論から読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海学園大学学術研究会編『学園論集』	6. 最初と最後の頁 21 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 北原寛子	4. 巻 47
2. 論文標題 「すべての叙事文学の中間物」 18世紀小説理論の展開から読むヴィーラント『新アマディス』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道大学独語独文学研究年報	6. 最初と最後の頁 18 - 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 北原寛子	4. 巻 183
2. 論文標題 世界は学び舎、人間は学徒 スイス派『想像力の影響と使用について』における「想像力」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海学園大学学術研究会編『学園論集』	6. 最初と最後の頁 83-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hiroko Kitahara	4. 巻 1
2. 論文標題 Von der Veraenderung des Menschenbildes und dessen Einfluss auf die Romantheorie im 18. Jahrhundert	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Hrsg. von Yoshiyuki Muroi: Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Tokyo u. Muenchen; Indiciu. 2020	6. 最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 北原寛子	4. 巻 178
2. 論文標題 J. J. ボードマーの詩学における「想像力」 18世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷について 一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海学園大学学園論集	6. 最初と最後の頁 91 - 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Hiroko Kitahara
2. 発表標題 Von der Veränderung des Menschenbildes und dessen Einfluss auf die Romantheorie im 18. Jahrhundert
3. 学会等名 Asiatische Germanistische Tagung (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------